

由井 浩

よみがえれ梅の里

東京の多摩地区にある青梅市は全国で唯一の市名に「梅」の字がつく市で、梅を重要な農業、観光資源としてきた。

しかし、2009年に見つかったウメ輪紋ウィルスの感染が拡大して、感染した梅の木を伐採せざるを得なくなった。市の南西部にある「梅の里」と市が力を入れている梅の名所の中心をなしている“梅の公園”では、1700本あった梅の木が1200本に減少してさらに伐採しなければならなくなった2014年に、毎年2月下旬～3月に行われてきた梅まつりを行った後で公園内に残っていた梅の木を全部伐採した。その後3年間ウィルスを媒介するアブラムシの駆除などの対策を徹底して、梅の公園では2017年から再植栽ができるようになった。

以上の情報を調べていると現地の最近の様子を見に行きたくなって、1月12日にJR青梅線で青梅駅まで行き、そこで奥多摩方面行に乗り換えて、2つ目の日向和田（ひなたわだ）駅で降り、10分ほど歩いて梅の公園に着いた。

古い梅の木が全部伐採されて、苗木と若木が植栽されたばかりの小山は遠くから眺めると冬枯れの寂しい光景だが、園内に入ってよく見ると、植えられた若木の近くに、

『みんなで植えました！市民ボランティアの子供達が、「春にたくさんの花が咲くように」願いを込めて植栽をしました。』

と書かれた植栽時の写真入りの立て札があり、これを見ているうちに気持ちが和んできた。



梅の公園内の小山の光景



公園内の立て札→



梅の若木に付けられている管理札

植栽された梅の若木一本一本に青梅市梅の里再生担当者が管理する札が付けられていて、今後はウィルスの感染を根絶するとの決意が伝わってきた。若木の小枝には蕾がついていて、春には可憐な花を咲かせて市の関係者や植栽をした多くの市民などを微笑ませることだろう。

いずれ若木がある程度成長した時に梅の花の季節にまたここに来て、梅の里の再生が順調に進んでいることを確認したい。

この日はお昼過ぎから青梅駅近くで「青梅だるま市」が行われるので、梅の公園近くのお蕎麦屋さんで一休みしてからバスに乗って青梅駅に向かった。青梅駅の南側の近くを通る旧青梅街道の東西約1kmの区間が車両通行止めとなっていて、その西端にある市民会館でバスを降りた。街道の両側にだるまの露天とヤキソバなどの屋台が並んでいて、観光客も店の品定めを始めていた。



青梅だるま市の光景（1）市民会館近辺

露天、屋台をひやかしながら、会場の東端近くにある住吉神社に行き、梅の公園の小山が紅白の梅の花で埋め尽くされる日の再来を祈願した。



←青梅だるま市の光景
（2）住吉神社前